手しごと（物作り）

会員　横山 正夫（34 期）

子供の頃から物を作ることが好きだった。秋に街路樹の枝落としで落ちた枝を削ってチャンバラごっこをしたり，発売されはじめたプラモデルを組み立てたり（今の製品のような精密で，ピタリと部品が合う品物ではなく，完成に四苦八苦した思い出がある），長じては木工，漆塗り，鉄道模型作りと物を作ることが好きで，将来は物作りの職人になるのもいいなと漠然と考えることもあった。

しかし，祖父が弁護士（亡奥田實），叔父が裁判官（亡奥田英一）の家系に生まれ，いつの間にか司法試験受験生となり，弁護士40年となった。だが，この間も手しごとへの興味は続き，日本には職人が何代にもわたり受け継ぎ，発展させてきた多種多様な工芸品があり，その用の美に根ざした力強く，安定した美しさに惹かれるようになった。

いわゆる柳宗悦の提唱した民藝の世界に踏み込んだことになる。今，柳宗悦の民藝論を述べるつもりはないが，伝統的な手しごとに興味を持つと，その製品がいかに歴史，風土，社会情勢と結びついて発展してきたかがわかり，なお深みにはまった。例えば，九州の焼物を例にとっても豊臣秀吉の文禄，慶長の役で朝鮮半島から陶工が連れてこられなければ，九州の焼物そして今日の日本の焼物は存在しなかった。唐津，伊万里，小袋（しょうたい），薩摩等の焼物はすべてが朝鮮半島から連れてこられた陶工により開窯された窯だ。また，日本初めの磁器もしかりで，朝鮮半島の陶工による有田泉山の磁土の発見に始まり，その後，中国の赤絵の技術も吸収して発展するが，この有田磁器の発展も当時の世界情勢を抜きに発展できたものではなく，当時，ヨーロッパへ大量の磁器を輸出していた中国「明」がその消滅に至る国内情勢から輸出禁止処置をとったため，その代替として有田磁器の輸出が始まり，大量生産と技術革新が進み，有田焼の確立をみたのだ。

焼物に限らず，日本には庶民が営々として作り続けてきた笊，籠，漆器，織物，染物，はさみ，農具等々があり，それらがすべて歴史，風土に根ざしていることがわかると，これらの工藝品の現在位置が気になってくる。現代生活では生活様式の変化・化学製品の進化で旧来の日常生活必需品であった壺，瓶，籠，和服などは日常生活には不要となり，伝統的な手しごとは存続の危機にあることがわかる。

自動車エンジンも電気に置き換わり，紙文化もデジタルに置き換わり，よりクリーンで効率的な世の中になることは人類の発展にとって望ましいことであることは間違いないが，人間はどこまでいっても生身の人間であり，情操面での人間性はなお大切にしなければならず，日本人としてその伝統と風土に根ざした職人の手しごとは，今後も継続して作られ，次の世代にも引き継がれなければならないと思う。

私は，伝統的な職人による手しごとを次代に承継するために「手仕事フォーラム」という活動を応援しているが，なおこの活動を活発化させたいものだ。

江戸期より一子相伝で地元の土を使い，蹴ロクロで成形し，登窯で焼いている大分県小鹿田の蓋付大甕です。（筆者所蔵）